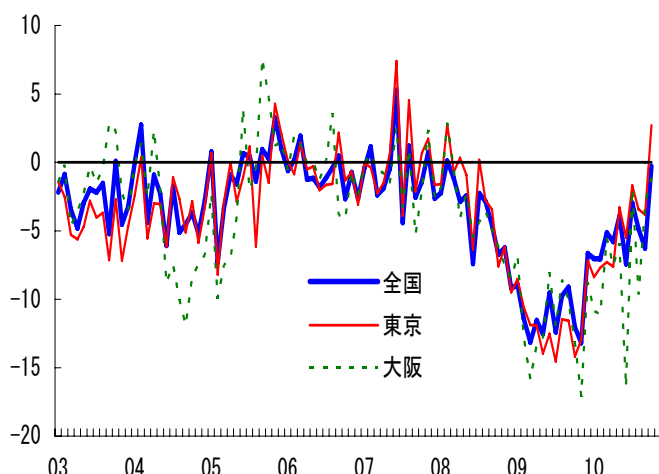


テーマ：百貨店売上高（2010年10月）
～32ヶ月ぶりのプラス転化～

発表日：2010年11月24日（水）

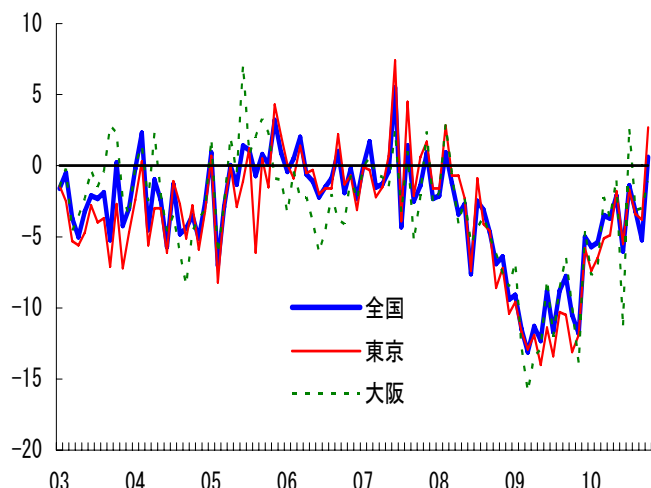
第一生命経済研究所 経済調査部
エコノミスト 岩田 陽之助
TEL:03-5221-4525

百貨店売上（全店、前年比）



（出所）日本百貨店協会「全国百貨店地区別・商品別売上高」

百貨店売上（既存店、前年比）



（出所）日本百貨店協会「全国百貨店地区別・商品別売上高」

○ 百貨店売上高は前年比+0.6%

10月の百貨店売上高（全国）は前年比+0.6%（店舗調整後）と、32ヶ月ぶりに前年比プラスに転化した。このところやや弱含んでいた百貨店販売だが、再び持ち直しに転じる結果となっている。前年に比べて日曜日が1日多いといったプラス要因もあるが、それを差し引いても比較的良好な結果といえるだろう。

10月の百貨店販売が改善した主な理由としては、月下旬以降の気温低下が上げられる。残暑が厳しかった9月から一転して、10月下旬以降の気温低下によって、これまで出遅れ気味だった秋冬物衣料の販売増加につながった。コート、ダウンなどの冬物重衣料に加え、マフラー、ストール、手袋などのアイテムが好調であったようだ。品目別に見ても、衣料品（10月：前年比+0.3%、9月：同▲8.9%）は前年比プラスに転化している。

他の商品を見ても、今月は回復傾向を示したものが多い。身の回り品（10月：前年比+1.7%、9月：同▲7.2%）、家庭用品（10月：同+1.7%、9月：同▲2.9%）、食料品（10月：同▲0.1%、9月：同▲3.1%）など幅広い品目での持ち直しが確認出来る。百貨店協会によれば、①プロ野球優勝セール、文化催事や海外・地方物産展など催事の積極展開が集客に寄与したこと、②最近の家庭回帰志向を背景に家庭用品が好調を維持していることなどの要因が指摘されている。

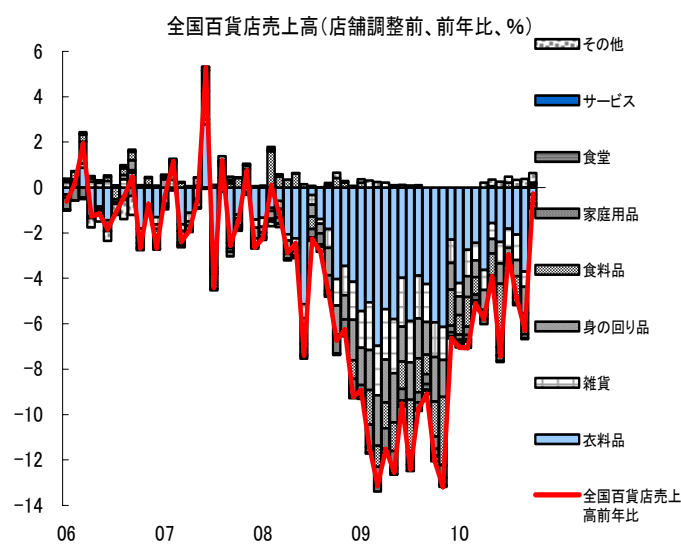
また、高額品の弱含みにも歯止めがかかりつつあるようだ。美術・宝飾・貴金属（10月：前年比▲2.3%、9月：同▲4.0%）と減少幅を縮小させた。急激な円高の進行や株価の下落が一服しつつあることにより、一時期の落ち込みから脱しつつあるように思われる。

○厳冬が季節商品の販売増加につながる可能性があるが、先行きに過度の期待は禁物

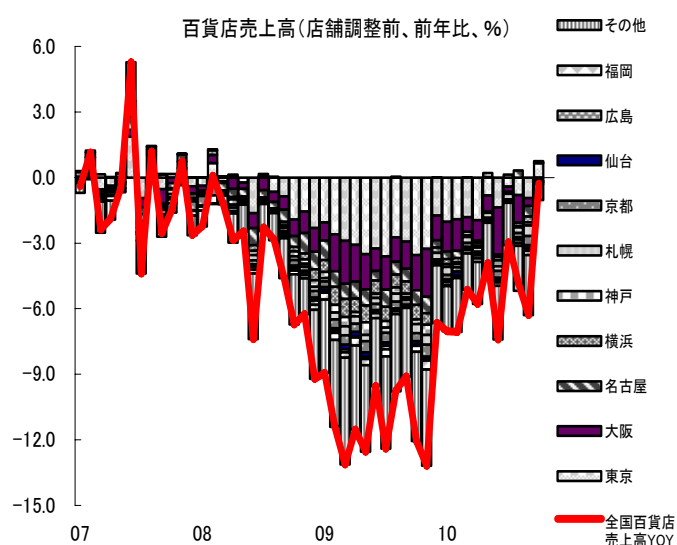
10-12 月期の個人消費については、自動車やたばこの反動減など大幅なマイナス寄与が予想される要因が多いが、10 月の百貨店販売を見る限り消費の基調の部分は持ち直し傾向が続いているようだ。

また、今月は気温の低下が衣料品販売などを押し上げたが、先行きも同様の傾向は続きそうだ。気象庁によれば、今年度はラニーニャ現象の発生による厳冬が予想されており、今年同様に季節商品の販売が増加する可能性がある。百貨店販売は当面底堅い推移が続く可能性が高い。

ただ、消費者の節約志向は依然として強く全体として改善ペースが加速していくような姿は想定しづらい。7-9 月期の過剰消費の反動から家計は生活防衛モードに入りやすく、財布の紐は決して緩んでいるとは言えない。商品選択の目は厳しく、客単価も低下傾向が続くと予想される。冬のボーナスについても前年比マイナスとなったことを示唆する調査が見られるなど、雇用・所得環境の回復は緩やかなものに止まっている。お歳暮、クリスマスや初売りといったイベントも待ち構えるが、先行きについて過度の期待は禁物だろう。



(出所) 日本百貨店協会「全国百貨店地区別・商品別売上高」



(出所) 日本百貨店協会「全国百貨店地区別・商品別売上高」